



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	受容過程に生じたトラブルに 対処する修復について : フェイスに関わるものを中心として
Author(s)	張, 玲玲
Citation	研究論集, 13, 285(左)-302(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54075
Type	departmental bulletin paper
File Information	016_ZHANG.pdf



受容過程に生じたトラブルに 対処する修復について

— フェイスに関わるものを中心として —

張 玲 玲

要 旨

本稿では主に会話の受容過程に生じたフェイスに関わるトラブルを取り上げ、フェイスワークに関する枠組みを提示した上で、それに対処するための修復方策及び修復組織について分析を行い、フェイスバランスに対する調整や修復の方略から、その裏にどういう語用論的原理が働いているかについて考えてみたい。

本稿のデータは2種類からなる。一つは東京外国語大学で作成された『BTSによる多言語話し言葉—日本語会話1 (2007年版)』に収録された会話資料であり、もう一つは『日本人母語話者による会話リソース』(2012年北海道大学文学部の学生の協力の下で収集した会話資料)である。

まず、研究の出発点として、先行研究で指摘されたフェイス侵害行為に対する補償行為をよりマクロ的な視点から捉え直し、フェイスバランスの視点を確定した。指向性を持っているフェイス侵害行為とフェイス支持行為の4種類の作用力 (①自己指向的 FTA ②他者指向的 FTA ③自己指向的 FSA ④他者指向的 FSA) の下で、会話参加者間に存在しているフェイスバランスの均衡が失ったケースに注目した。会話参加者がフェイスバランスを維持するために行われた様々な方略を観察することを通して、その方略が一定のパターンで施される現象が見られた。

そして、考察結果からみれば、会話参加者のあらゆる行動が両者間に存在しているフェイスバランスの均衡状態に影響を及ぼしうるため、話者が発話する際に、当面のフェイスバランスの状態及び相手の言動がそれに与える影響などをトータルした上で、そのバランスを維持する効果のある発話を選択しているというシステムが成り立っているのではないかという結論に至った。このシステムの適用範囲を検証するために、今後更に多くの会話例を収集して検討しなければならない。

1. はじめに

本稿¹では主に会話の受容過程に生じたフェイスに関わるトラブルを取り上げ、フェイスワークに関する枠組みを提示した上で、それに対処するための修復方策及び修復組織について分析を行いたい。

2. 受容のトラブルに対処する修復

修復 (repair) に対して単純な定義を下すのは至難の業であり、というのは、「修復とはトラブルに対処するための行為である」(Schegloff et al. 1977, Suzuki. 2010 など) という従来の認識からも分かるように、その対象に当たるトラブルに対して明確な定義を決めなくては修復を明確に定義することも困難であり、従って、修復を定義する前にトラブルとは何かという問いを避けることができないと思う。

2.1 受容過程に生じたトラブルについて

まず、トラブルについては、発話の産出及び聞き取りの過程に生じたもの→発話の理解過程→発話の受容過程という順に捉える立場に立って、受容過程に生じたトラブルとはその前の段階、いわゆる理解の段階に問題が生じなかったのを前提としているものである。つまり、相手の発話を理解したあとの段階において、相手の意図や推意/前提などを受け入れない場合や、フェイスに関わる問題が生じた場合などが考えられる。

次に、こういうトラブルが従来の修復における位置づけに関しては、まず、修復が「誤りの発生」に依存しないことが明らかにされてきた。フェイス上のトラブルとは、言語表現が正しく示され、且つ聞き手に正確に理解された上で生じた問題であるため、その存在が言い間違いといったようなトラブルより抽象的な部分があると言わざるを得ないだろう。

そして、実際の経験では、我々が会話をする際、相手のフェイスを傷つけないように前もって自分の発話を調整することもある。もし相手のフェイスを傷ついたとすれば、また何らかの行動を取って修復することもある。こういう行為は受容の範囲に含めるべきではないかと考える。だが、修復とは、会話参加者のどちらかにトラブルを認識されるのを前提としているため、「まだ起ってはいないが、予期されうる破綻を未然に防ぐための方略」を修復ではなく、調整 (adjustment) とするべきだと考える。つまり、調整はトラブルの発生を抑制するメカニズムであり、修復は既に発生したトラブルを解決するメカニズムである。

¹ 本稿は「社会言語科学会第30回研究大会予稿集原稿」を修正したものである。

2.2 フェイスに関わるトラブルと修復との関係について

従来の修復研究では、受容上のトラブルが扱われないままにしてきた状況²のなか、日本語における修復に注目した串田（1995）では、remedy（フェイスへの脅威を対象としている）とされてきたものを、repair の範疇に入れるべきだと主張した。だが、それをめぐる分析は管見の限りまだないようである。そして、こういう主張は Goffman から由来したと言えるのではないと思われる。

社会学及びコミュニケーション論の観点からフェイスに関する先行研究が数多くあり、その中には、フェイスと修復との関係を示唆する研究もある。Goffman（1967）は、「人は自分及び他者のフェイスを常に保持しようと、フェイスが脅かされることを防いだり、失われたフェイスの回復に努めたりする」と述べている（横溝 2012：17）。Goffman（1967）は、フェスワークを「自他のフェイスを保つために取る行為」と定義した上で、さらに 2 種類に分けた。一つは、「これから起こりうる自己像が損なわれる恐れのある出来事をコントロールしようとするストラテジー」という「回避プロセス（avoidance process）」³であり、いま一つは、「既にダメージを受けたり失ってしまったたりフェイスを回復しようとするストラテジー」という「修正プロセス（corrective process）」である（浅野 2012）。

このような考えを踏まえて、受容過程におけるフェイスに関わるトラブルを取り上げ、それに対処する修復行為について分析を行う。一方、上記の先行研究は殆ど理論上で展開されたものであり、実際の会話を分析していない。それに対して、本稿では、実際の会話を対象として、修復プロセスの特徴を解明していきたい。以下では、同じく実際の会話を分析した関連の先行研究について述べる。

2.3 会話におけるフェスワークに関する先行研究

「受容のトラブル」といった用語が使用された先行研究はないものの、フェスワークに関する分析が数多くあり、その中から修復と何らかの関係を持っているものだけ紹介する。

まず、三牧（2008）では、よりマクロなレベルからフェイス侵害行為（FTA）を捉え、会話参加者が「FTA バランス探究行動」を相互的に行う可能性がある」と指摘した上で、Brown & Levinson（1987）に代表される従来のような「FTA の量を見積もってから取った FTA 緩和策」としてではなく、①過度の FTA を犯したと認識すると相手からの FTA を誘導したり自らに対

² 修復研究の先駆である Schegloff et al.（1977）では、発話産出・聞き取り・理解に関わるトラブルに対処するものとしているためか、その影響から抜け出せない面も考えられうる。

³ 横溝（2012）によれば、フェイスに関わる問題に対処する時間的位置によって行われるフェイス・テンポラル・ストラテジーという研究においては、「予防的（preventive）フェスワークストラテジー」と「回復的フェスワークストラテジー」と呼ばれているということである。

して FTA を遂行したりする②相手から多めに FTA を受けたと認識した場合に自発的に相手に対して FTA を行うといったようなダイナミックな面があると指摘した。

次には、日韓の対照研究という視点から、「FTA 補償行為」を中心に考察した林 (2010) によれば、友人同士の会話においてどちらか一方によって「否定的評価」⁴ をされた後、受けた側が「①否定的側面の肯定化②相手の立場から弁論する③自分もそうだと述べる④否定的側面の解消・改善⑤他の側面を褒める⑥自身の判断を疑う」といった 6 種類の FTA 補償行為のどちらかを施してフェイス侵害を解消するという現象を記述した。

これらのような「過度な FTA」⁵ や「相手による否定的評価」というのは受容のトラブルを引き起こした原因として捉えられる。ちなみに、従来のフェイスに関する多くの先行研究においても、「何らかのフェイス侵害やコンフリクトや困惑が生じたあと」ということを前提として、そういう状況が生じたらどういふフェイスワークが施されるかという「激化 (Aggravation) — 緩和 (Mitigation)」というパターンに着目しているようである。本稿では、「会話参加者のどちらかのフェイスが侵害されたあとのフェイスワークだけでなく、両者間のフェイスバランスが崩れるまでの過程においてどんなフェイスワークが行われたかにも着目する」というよりマクロ的な視点から考察をしたい。次節では、フェイスバランスという考えについて述べる。

3. 本研究のアプローチ

3.1 フェイスバランスという考え方

本稿では、Brown & Levinson (1987) の中心概念であるフェイスを利用するものの、適切な文脈があればあらゆる行為が FTA になりうるとし、フェイス侵害を避けるために「距離の遠近操作」とも呼ばれるポライトネスという方策を駆使するという捉え方をしない。このような予防的な方策を「フェイス調整行為」と位置づけたい。

一方、Goffman (1967) が指摘したように、「人は自分及び他者のフェイスを常に保持しようとする」という欲求がある。ただし、実際の会話では、自分のフェイスを保持しようとする行

⁴ 林 (2010) では、主に親しい間柄同士の間で行われるけなし・冗談・悪口などのような現象を指す。そして、山路 (2005) では「会話の相手やその行動、発話、認識及び相手が好意を抱いている人物・物事に対して、否定的な評価を述べる行動」というふうに定義を下したと指摘した。

⁵ この言い方は三牧 (2008) で用いられている。「会話参加者一方が質量ともに過度に FTA を遂行した会話例」に限定されたものの、質量ともに過度なフェイス侵害行為とは何かについては明確に定義していないようである。全体的にみると、①相手の過去の受験失敗体験をめぐる会話②相手の国の食事を批判する会話③痛烈なからかいが生じた会話という三種類の話題を取り上げたため、「質的に過度」とは話題の性質と関わっているように見える一方で、「量的に過度」とはフェイス侵害行為が何度も繰返されるということを指していると考えられる。

為は時々相手のフェイスを侵害する恐れがあり、逆に相手のフェイスを立てることはまた自分のフェイスを傷つけることもある。自他のフェイスに対する欲求は時に矛盾し、同時に満たされることは容易ではない。実際の分析では、ある行為が一方にとってフェイス侵害になるものの、同時にその反作用力を考えなければならないため、一つの言語行為がフェイスに対してどのような効果を持つかは判断しにくいことがある。話し手のフェイス欲求か聞き手のフェイス欲求か、どちらか一方に着目するだけでは、ある言語行為のフェイスに対する効果を説明しにくいのではないかと考えている。

これを解決するために、本稿では以下のような立場を取る。①会話参加者間の「フェイスバランス」を客観的に存在しているものとして捉える。②会話参加者がこれまでの会話を踏まえながら、両者間のフェイスバランスの状況について判断を行った上で調整や修復を行う。ただ、両者間の判断が異なる場合がありうる。

つまり、本稿では、会話参加者どちらか片方のフェイスに着目するのではなく、一対一の会話おける両者間のフェイス状態を「バランスが取っているか否か」に注目し、両者間のフェイスバランスの状態が均衡を失ったと一方によって判断されれば、その状況を改善するための「フェイスバランス修復方略」を取る傾向があり、一方、フェイスバランスが均衡を失いかけたりまたはそういう危険にさらされたりしていると判断されれば、その状況を回避するための「フェイスバランス調整方略」を取る傾向があるという点に着目する。というのは、フェイスバランスという状態そのものを会話参加者の間に抽象的に存在している参照物として位置づけながら、その状態に対する会話参加者の判断でそのバランスを維持するように行為を調整し、必要に応じて均衡を失った／失いかけた状態を修復する。そうすると、「人は自分及び他者のフェイス」を常に保持しようとするのではなく、「人は常に相手との間のフェイスバランス」を保持しようとする捉えられる。

3.2 フェイスバランス修復方略について

「フェイスバランス修復方略」の捉え方について述べる。まず、(一対一の会話において社会的立場が同等である)二人⁶が会話を始める時点では、フェイスがバランスを取っている状態にあるとして、会話の流れとともにそれがバランスを失う危険性にさらされうという前提に立っている。そして、フェイスがアンバランス状態に落ちるのは必ずしも FTA (Face-Threatening Act: フェイス侵害行為) によるとは限らず⁷、指向性のある「フェイス支持行動」

⁶ 社会言語学的要素の影響を最小に抑えるように、本稿で取り上げたデータはすべて若者同士の会話に限定している。

⁷ この点では、従来の研究において FTA だけに注目したやり方と異なっている。

(Face Supporting Act, 略称 FSA)⁸ も考えられる。同時に、指向性のある FTA も常にマイナス的な効果をもたらすわけではなく、フェイスバランスを修復する時に重要なストラテジーの一種として捉えられる⁹。つまり、ここで強調したいのは、この2種類の行動は指向性のある作用力であることを看過してはならないことである。つまり、自己指向的 (self-oriented) であるか他者指向的 (other-oriented) であるかという角度から4種類に分けられる。表1で示す。

表1 フェイスバランス修復方略の4種類

種類	自己指向性 (+)	自己指向性 (-)
FTA	①自己指向的 FTA	②他者指向的 FTA
FSA	③自己指向的 FSA	④他者指向的 FSA

ある言語的行動がこの4種類のどちらに近い判断する際に、主に「発話者がある発話をもって誰／何に対して否定的な評価／肯定的な評価を下したのか」ということを基準にする。そして、ここでは、FTA と FSA のそれぞれの性質について考えてみたい。

まず、FTA については数多くの先行研究があり、特に Brown & Levinson (1987) であらゆる発話が FTA になりうるという考えが示されて以来、ある発話が FTA であるかどうかは議論されてきている。それに対して、FTA の強弱についての議論があまり見られない。本稿では、その強弱を質的に判断する方法と量的に判断する方法と大まかに区別できると考える。ただ、質的に判断することはなかなか困難である。というのは、FTA というのは相手のある種のフェイス欲求を侵害するものであり、質的にその強弱を判断するとしたら、その発話がどういうフェイス欲求を侵害したかを考えなければならない。例えば、フェイス欲求についてより詳しく分類した Ting-Toomey (2004, 2005) を取り上げて見てみよう¹⁰ (横溝 2012)。

- ① autonomy face：他者に管理されたくない、何かを負担したくない、自由でありたいということを他者に認識してもらいたいというフェイス。

⁸ 岡本 (2006) で、この名称が用いられている。そこでは、「聞き手のフェイスへの影響」という観点から、「①聞き手のフェイスに関わらない行動② FTA ③聞き手のフェイスへのダメージの回復を目指す行動」という3種類に分けた上で、更に③を「フェイス補償行動・フェイス修復行動・フェイス支持行動」という下位類型を提出した。フェイスへのダメージは FTA だけによる点や、3つの下位類型の関係はすべて FTA を解消するための装置であるという点などが従来の捉え方と実質的には大差がないという不足があると思う。

⁹ これについては例7を参照されたい。

¹⁰ この6種類が排他的な関係ではなく、「重複して現れることがあると論じている」と横溝 (2012: 18) で述べている。

- ② inclusion face：親しさ，協力性を感じさせる価値ある仲間であると他者に認めてもらいたいというフェイス。
- ③ approval face：外見，社会的魅力，地位，物，コネといった外的な要素を認めてもらいたいというフェイス。
- ④ reliability face：自分の言動は信頼できるということを認めてもらいたいというフェイス。
- ⑤ competence face：知性，技術，専門的な知識，能力といった内的な要素を認めてもらいたいというフェイス。
- ⑥ moral face：自らの誠実さ，威厳，名誉，礼節，道徳の高潔など他者に尊重してもらいたいというフェイス。

この6種類を見ても，どちらを侵害すればより深刻な FTA になるかは判断しがたい。従って，本稿では質的な方法ではなく，量的に判断することにする。量的とは具体的な数式ではなくて，主に FTA の連続回数で判断する。比べてみると，連続して FTA を行うケースでは，フェイス侵害が激化になるのに対して，一回だけの場合，特にその程度を軽減する方策を伴いながら施されるケースではフェイス侵害も弱化されていると判断できるだろう。

次に，FSA とは主に相手のフェイスを持ち上げる行為，例えば，相手に関わっていることを褒める／賞賛するという発話行為を指している。ただ，相手の既にダメージを受けたフェイスを持ち上げるかそれとも普通の状態から持ち上げるかというふうに区別が必要である。というのは，前者は損害のあるフェイス状態に対して修復機能があるのに対して，後者はかえってフェイスバランスの均衡状態を崩す行為になりかねないのである。これについては後に実際の会話例で説明する。

4. 考察

本稿のデータは2種類に分けている。一つは東京外国語大学で作成された『BTS による多言語話し言葉 ― 日本語会話 1 (2007 年版)，以下は BTS で示す』に収録された会話資料であり，もう一つは『日本人母語話者による会話リソース』(2012 年北海道大学文学部の学生の協力の下で収集した会話資料，HCR で示す)である。以下ではまず，単独のフェイスワークに対応するフェイスバランスの修復行為について述べ，それからフェイスバランスが崩れるまでの過程を観察し，交互に行われたフェイスワーク及びアンバランス状態を修復するストラテジーについて記述してみたい。

4.1 自己指向的 FTA に対しての他者指向的 FSA

まず，表 1 における〈①←④〉というパターンを見てみる。つまり，話し手が自分のことに

対して否定的評価を下したあと、相手によってフェイス支持行為をしてもらった場合を指す。

例1と例2を参照されたい。

例1 〈BTS 初対面同性同士雑談⑧〉

Aは大学4年生で中国語を専攻としており、Bは台湾で日本語教師を勤めているため中国語ができる。AがBに自分の中国に留学したときの経験について語っている。

1 A でもいるときはほんとに辛くて、なんで辛いかっていうとたぶん言語が伸びないからで。

2 B 〈笑い〉。

3 A それは自分が悪いんですけど。

4 B → まあね、ある一定ぐらいでね、行くと結構伸びるのほんと難しい：：。

5 A ね：：

Aは自分の留學生活に対して否定的評価を行い(1A：自己指向的FTA)、2Bで「好まざる反応」(他者の自己指向的FTAがなされたのに対して、それを否定するかその立場に立って共感を示すかというような好ましい反応に対して言っている)が行われ、3Aで引き続き自分に対して否定的評価を行ったため、両者間のフェイスバランスが崩れたと判断できよう。このような好ましくない状況において、Bが修復を行う必要性も出てきた。

4Bの修復方略を見てみると、Bが相手の発話に対して直接的な否定ではなく、表では否定にならないような言い方を選択している。つまり、もしもAの「語学力が伸びないのは自分が悪い」という発話に対して、Bが「あなたが悪くないよ」というふうに直接的な否定を使用したとしても、フェイスに対する修復効果がないだろう。「語学力が伸びないことに対して責任を感じている」という問題に対して、「一定のレベルとなると上達が難しくなる」という一般論を通して、「それはよくあることだから、そんなに悪く思わなくてもいい」という趣旨をもって、問題自体に触れずにそれに対する評価の方に論点をずらして修復を行った。つまり、4Bで「否定的評価を解消・改善する」という方略で他者指向的フェイス支持行為を行ったのである。

修復組織がどうなっているかに関しては、例1は「他者開始・他者修復」の類に属している。具体的には、修復対象となったトラブルとは、Aが施した「連続的な自己指向的FTA」によってバランスが失ったフェイス状態であり、このアンバランス状態を修復したのはBであり、その修復方略とは「他者指向的FSA」である。その修復が成功した証拠は5Aでの共感を表す「ね：：」から窺える。つまり、Bの反応がAに期待されるのと同じであるため、こういう応答によって双方間のフェイス状態のバランスを取り戻されたのである。もう一つの例を見てみよう。

例2 〈BTS 初対面雑談⑧〉

- 1 A あ、実家が東京なんですか？
2 B あ、実家名古屋です。
3 A あ、名古屋なんですか。
4 B はい。
5 A 名古屋って都会ですね。
6 B 都会、あ、ごめんなさい。名古屋って言ったんですけど、名古屋の近くの田舎みた
7 → いなとこで、分かりやすく、ちょっと見栄えをはってしまった。
8 A あ、いやいや。私も、仙台ですけど、仙台の一番外れですから《2人笑い》。
9 B すいません《笑いながら》。

Bが2Bで実家の情報を粗略化してAに伝えた。というのは、初対面の人に実家がどこにあるかと聞かれる時、普通は誰でも知っている場所を言うだけで十分である。有名なところ以外、わざわざ詳しい場所を言う必要がないだろう。しかし、5AでBが実家について更なる情報を要求したため、グライスの質的原理を破らないように、「名古屋ではなく、名古屋の近くの田舎にある」というより詳しい情報を伝えた。そしたら、Bには「なぜ最初にそう言わなかった」ということについて解釈する必要があり、そこで、7Bでは「見栄えをはってしまったので、名古屋と言った」という自分のフェイスを侵害する発話をした。つまり、7行目の発話によって元々均衡が取れているフェイスバランスを崩しかけた。

そういう不均衡な状態を修復するために、8Aでは「実家が仙台の一番外れにある」という相手が求めている事実を伝えることで、いわゆる情報量を増やすことで相手のやり方に理解と同感を示し、相手の損害を受けたフェイスを持ち上げた。もしも、8Aでは「あなたが見栄えをはっていないよ」というふうに直接的な否定をしたとしても、フェイスを修復する効果が少ないだろう。つまり、相手の「自己指向的な否定評価」（見栄えをはってしまった）に触れずに、事実（私の実家も仙台の一番外れにある）に論点をずらして、「そういう伝え方が一般的であるから、別に見栄えをはっていないよ」という趣旨で修復を行ったわけである。現象からみると、直接的に相手の自己否定を否定してもフェイスバランスに対する修復の効果があまりないため、論点をずらすことで修復が実行されたという点では二つの例で共通しているのである。

総じて、会話参加者間においてフェイスバランスというものが存在し、あらゆる行動でその均衡状態に影響を及ぼしうるため、発話する際に、話者が当面のフェイスバランスの状態及び相手の言動がそれに与える影響などをトータルした上で、そのバランスを維持する効果のある発話を選択しているというシステムが成り立っていると考えられる。この二つの例で示したように、一方的に自分に対してフェイス侵害をすると、つまり、一方が下がった状態になってし

次に、〈④←①〉というパターンを見てみる。これはよく見られるものであり、例えば、〈褒め－受け入れ拒否〉という場合はそうである。例3を参照されたい。

8 A 〈沈黙 2 秒〉 ご主人と韓国語で話さないですか。

— 294 —

ただ、7Bで「連続的他者指向的FSA」が行われたため、フェイスバランスが再び均衡が失われたのである。この2度目のアンバランス状態に対してAは修復を放棄し、新しい話題で先に展開した。この場合においては、フェイスバランスを取り戻すより、相手の褒めてくれる好意を受け入れる方がより好ましいからであろう。つまり、修復とは「フェイスバランスが生じたら常に行われうる」ものでなく、「しない方がより好ましい」という場合もある。

というのは、まず、ここで修復対象になるのはフェイスに関わっているものであり、発話の産出問題や理解問題と比べて修復の緊急性がかなり低いものである。つまり、修復の緊急性がより低いトラブルなら、会話参加者にとってそれを今すぐ修復しても或は修復を回避しても許されるという性質が備わっている。次に、3B～5Bにかける褒め行為が何らかの損害を受けた後のAのフェイスに対するものではなく、普通の状態に対して行なわれるものである。つまり、フェイスバランスが均衡を取れている状態において、一方的にフェイスを持ち上げる行為には均衡を失わせる働きがあるということである。こういう場合において、褒められた側にとって、大まかに①褒めを受け入れる②相手のことを褒める③褒めを受け入れないという三種類の選択肢が考えられる。

①では、謙遜を知らないと思われうるため、自分のイメージを傷つけることになる。つまり、フェイスを持ち上げてくれる行為を受け入れたら両者間のフェイスバランスに悪影響を生じてしまうのである。②はバランスを維持する手段としてよく使われるが、ここでは褒める側(B)が褒められた側(A)の先輩であるため、自分の先輩の語学力を褒めることが好まれるとはいいたいだろう。そしたら、ここでは、褒められたAには③という選択肢しか残っていないが、③にはまたリスクが潜んでいる。というのは、相手の積極的な褒め行為がフェイスバランスを失わせる働きがあるものの、好意のもとで施された点が変わらないため、褒め行為を受け入れないことは相手の好意を拒否することに繋がっており、連続的な拒否行為では相手に不快感を感じさせるだけではなく、自分のイメージも(例えば、「素直ではない」というような印象を相手に与えてしまう可能性がある)傷つけてしまう可能性がある。

まとめてみると、普通の状態(ダメージを受けていない)にあるフェイスを持ち上げられる場面においては、フェイスバランスに与える悪影響を最小限に抑えるために、それを受け入れない趣旨から出発し、褒められた事項を否定したり低く評価したりする手段が可能であり、時に返事を曖昧化にしたり話題を転換したりする方法なども有効である。

4.3 他者指向的FTA に対しての自己指向的FSA

そして、表1における〈②←③〉というパターンを見てみる。つまり、相手にフェイス侵害されたあと自分で自分のフェイスを持ち上げる方策でバランスを取り戻す場合を指す。

例4 〈BTS 初対面雑談①〉AとBが初対面で、Bは就職試験に英語の会話能力が求められて

困っているようで、A に英会話を教えてほしいという希望を伝えた後、A は自分が語学旅行に行ったことがあるのを B に話した。

- 1 A あたし、2年の9月ぐらいに、3週間行ったんですよ。
2 B 3週間？
3 A はい、1人で。
4 B → たった3週間で、何か、なります？ 何かなるって [いうか：:]。
5 A [いや、でも]、授業はおもしろかったですよ、すごい。
6 B 語学学校行ったん [ですか]。
7 A [はい]。
8 B あ、そうなんですか。

例4では、Bが4Bで相手のしたことに対して否定的な評価(4Bから「たった三週間で何にもならないだろう」という推意が得られる)を行ったため、フェイスバランスが崩れた。さらに、BがそのFTAに自ら認識できたことを「何かなるっていうか」という自己修復開始表現から窺えられる。

修復組織からみると、例4は「自己開始・他者修復」の類に入っている。具体的には、修復対象となったトラブルとは4Bの「他者指向的FTA」によるフェイスのアンバランス状態であり、これを修復開始したのはBであるが、完成したのはAであり、その修復方策とは「自分が参加した語学研修は期間が短いかもしれないが、せめて授業が面白かった」という肯定的評価で「自己指向的FSA」を行ったのであり、部分修復として完成した。もう一つの例を見てみよう。

例5 <BTS 友人同士雑談⑥>

- 1 A 普段相手にたいしている印象。
2 B → あ：最近思ったんはな(ああ)、あれがある。Aさんはなんか、人のこと干渉すんの結構好きやんか。
3 A あん。
4 B → やけど：自分に対しては、なんか、絶対干渉されやんようにしてるやろ、結構。
5 A ⇒ それでも、あんまね：干渉してこないよね、やっぱね。
6 B → なんか、干渉すんっていうオーラ出してるもん。
7 A まじで？
8 B うん。
9 A ⇒ おれ結構、あの：聞かれたら：：言う気まんまんなんだけどさ。

この例では、B が 2 B (「あなたが人のこと干渉することが好きだ」)・4 B (「自分のことを絶対に干渉されないようにしているのに、人のことを干渉するのが好きだ」)・6 B (「人が干渉してこないではなくて、あなたが干渉させないようにしているからだ」というように、A に対して激烈なフェイス侵害を実施した。このような「他者指向的 FTA」に対して、A が 5 A (「私は干渉されないようにしているのではなく、他の人が干渉して来ないだ」という意味で弁解した)と 9 A (「私は別に絶対に干渉されないと思っていないよ。干渉された時に色々話しているのよ」という推意が得られる)で自分の損害を受けたフェイスを持ち上げようとした。つまり、この例からも見られるように、他者にフェイス侵害されたら、両者間のフェイスバランスを維持する手段の一つとして、自己指向的フェイス支持行為が利用できるということである。

ただ、例 4 では、会話参加者が初対面であり、例 5 では友人同士である。従って、初対面の会話においては、自己開始を伴っているところからも見られるが、そのフェイス侵害行為がかなり弱化されている。それに対して、友人同士の会話となると、その侵害の程度が激化ばかりしている。これは、初対面同士では両者間のフェイスバランスの傾きにより敏感であるため、友人同士ではフェイス侵害に対する許容範囲も多少広くなるということに関連しているかもしれない。

まとめてみると、会話参加者間においてフェイスバランスというものが存在し、あらゆる行動がその均衡状態に影響を及ぼしうるため、話者が発話する際に、当面のフェイスバランスの状態及び相手の言動がそれに与える影響などをトータルした上で、そのバランスを維持する効果のある発話を選択しているというシステムが成り立っていると考えられる。この二つの例で示したように、相手にフェイス侵害されると、つまり、侵害された側のほうが下がった状態になってしまうため、両者間のフェイスバランスが均衡を失うことになる。こういう状況に対して、自分でダメージを受けたフェイスを持ち上げるか相手のフェイスを侵害するかという選択肢があるが、どちらもバランスを維持する効果があると予想できる。この二つの例では、自分で自分のフェイスを持ち上げることでフェイスバランスの均衡化が取戻されたのである。

4.4 修復組織がより複雑な場合

上記で挙げた例はいずれも単純なものである。以下でより複雑な場合における会話例を二つ挙げる。まず、例 6 のように、フェイス修復しようとしたのに、修復方策を間違えてフェイスバランスを更に悪くして、修復の組織が複雑になることもある。

例 6 <BTS 初対面雑談①> A と B は初対面で、A は B に英会話を教えてもらうように頼んだ後、しばらく経ってから再確認を行っている。

1 A え、でもほんとにいいですか？

2 B や、別にいいですよ。あんまり為にならないと思いますけど。

- 3 A → いや、ってか、本当になんか、しゃ、しゃべ、んーと、なんか、あ、相手がいるだけでいいん [ですよ]。
- 4 B [ん:]。
- 5 A でも、あたしの英語ってほんとにだめなん [ですよ]。
- 6 B [え:]、そんなことないですよ：東外大受かるくらいだもん。
- 7 A や、それない。何で受かったのか不思議なくらいだもん (う：ん)、ほんとに。

この例では、Bは初対面のAの依頼を受けたこと自体がAに利益を譲渡した行為である。同時に、利益を最小化することで相手にかかる精神的負担を軽減しようとして、2Bで「自分の協力がためにならない可能性がある」という否定的評価で「自己指向的 FTA」を行った。この場合、フェイスバランスを維持するためなら、相手の損害されたフェイスを持ち上げてあげる行為が有効であろう。

だが、3Aからは少なくとも2種類の推意が導かれる。一つは「しゃべらないといけないので、別に誰でもかまわないが、相手がいるだけでいいから」という推意であり、これでは「相手の能力を重視しない」という相手指向的 FTA になり、フェイスバランスが崩れてしまった状況を招来してしまったのである。もう一つは、「相手がいるだけでいいんですよ」という発話には、「そんなに大変ではないよ」とか「いてくれるだけで十分ですよ、ちょっとだけ協力してくれればいいんですよ」とかのような意味合いが入っているため、相手に対して負担の大きい要求をしていないという配慮が込められているというふうに解釈できる。ただ、こういう配慮的な推意からも「相手の能力を重視していない」ということを読み取れる。この2種類の推意が競合した結果、「相手の能力を重視していない」という側面を全面に出している一つ目の推意が取られ、実質上の「他者指向的 FTA」になってしまい、Bにとって連続的にフェイス侵害されたことになったのである。

そこで、5AでAが均衡を失ったフェイス状態に対して修復を試みた。その修復方策(5A)とは、Bに対しての連続的なフェイス侵害行為(2Bと3A)の補償として「自己指向的 FTA」(「自分の英語が本当にだめなので、あまり能力を発揮しなくても十分役立つのである」という推意)を施すものである。修復組織からみれば、4Bでの「ん：」という反応だけでは、Bが相手に修復を要請したとは判断しがたいため、Schegloff (2001a)によると、これは「第三順番での自己修復」(third-turn repair)という組織になっている。

次に、例7のようなより大きな範囲にわたるフェイス修復行動が含まれる会話例を見てみよう。

例7 <BTS 初対面同性同士雑談⑫> Bは自分の専攻が日本語であるということをAに伝えたあと。

- 1 A → えと、日本語以外に、(ええ)の外国語は…？
2 B ええ、はできないですね：：英語だけですね。
3 A → ああ、英語だけ。
4 B いやいや、だって英語はみんなね(はい)受けますもんね(はい)、日本人は。だ
5 か、それ：を受けてきたっていうだけで、(はい)あとはないですね。
6 A → 海外体験は？
7 B 海外も行かないですね、本当に。1回そのなんか、教育実習みたいので、(はい)
8 あの一、スロヴェニアという国へ(ええ、ええ、ええ)行って：：それは、2週間
9 だけ(はい)で。あとは韓国へ遊びに行ってたのが(はい)1週間で、(はい)本
10 当にそういうちょいちょいって(はい)###。
11 A → どうか学んでみたい、こう、外国語とかはあるんですか？
12 B ああでも、結構なんかやってみたら、どれでも面白そうですね、(ええええ)なん
13 ⇒ か。なんかそういうの、できるんですか？
14 A いや、だから、あの、外国語を学ぶのはね(ええええ)結構好きなんです[けども]。
15 B [あ、そう] なんですか。
16 A でもコンタクト全然とれないんで：：
17 B ⇒ は：：：え、今ちなみに、何語ができるんですか？
18 A 僕ね、英語の TOEFL が 470 点 (あーはいはいはい) ぐらい。
19 B ええ、ええ、ええ。
20 A だ、その程度なんですよ。
21 B そうですか：：でも、そのぐらいとれば、いいんじゃないです [か?]
22 A [いや]、それあの皆、大体高校3年の人、
23 B ああ、そうなんですか：：僕あんまり受けたことないんで。

この会話は二つのブロックに分けられる。

まず、1～12 B にかけて A は連続的な他者指向的 FTA (初対面の相手のネガティブフェイスを侵害しうる行為) をなしたことが観察される。まず、B にとって 2 B の「英語以外の外国語ができない」という発話がフェイス侵害になっている。それに、3 A におけるその事実を繰返す発話(「英語だけ」)にはその侵害行為を激化した働きがある。こういう状況において、B のフェイスを持ち上げてあげることで両者間における均衡が崩れかけているフェイスバランスを取戻すべきであろう。この一個目のブロックの内部では、1 A・3 A・6 A・11 A を通して A が何度も「他者指向的 FTA」を施した。そのうち、1 A・6 A・11 A は相手のネガティブフェイスを侵害する行為であり(というのは、もし相手が英語以外の外国語ができない／海外に行ったことがない／これ以上外国語を勉強する予定はないということであれば、その答えが直ちに自

分に対するフェイス侵害になるため、つまり、これらのような質問にはそういうリスクを孕んでいるのである)、3Aは先述べたとおり侵害行為を激化する作用がある。そして、このブロックでは一方的に侵害行為を受けたBが殆どフェイスバランスに働ける余地が残されず、有効なるフェイス支持行為が施さなかったところからも、フェイスバランスが次第に崩れてきたことが感じられよう。

次に、13B～23BにかけてBによって「他者指向的FTA」を二回(13Bと17B)行われたことが観察された。いずれも1A・6A・11Aと同じようなネガティブフェイスを侵害した行為として捉えられる。この2個目のブロックでは、Aは相手のフェイス侵害行為に対してあまり抵抗していないようにも見える。このAの反応はまさに三牧(2008)で指摘された「過度なFTA¹²を犯したと認識した側が相手からのFTAを誘導したり、自らに対してFTAを遂行したり」という現象に合っている。一方、Bの行動に注目すると、それは「相手から過度なFTAを受けたと認識すると自発的に相手に対するFTAを遂行する」という指摘に合致している。つまり、この例からは、フェイスバランスというものが客観的に存在し、会話参加者がその状態を評価した上で、二人で協力して修復方策を施したという現象が見いだされる。

全体的にみると、第1個のブロックで崩れたフェイスバランスを双方に認識され、第2個のブロックでそれを修復しようとして協力したことでバランスを取り戻したのである。そして、もう一つ看過されてはならないことがある。一個目のブロックではAが一方的にBのフェイスを侵害し、二個目のブロックではBが一方的にAのフェイスを侵害したという現象である。つまり、この例ではフェイス支持行為が殆ど使われていない。つまり、フェイス侵害行為がフェイスバランスに均衡を失わせるという働きだけでなく、均衡を取戻す方略としても使えるということである。

5. まとめ

本稿では、先行研究で指摘されたフェイス侵害行為に対する補償行為をよりマクロ的な視点から捉え直し、フェイスバランスの視点を確定した上で、それを崩す行動にはFTAだけでなく、FSAも可能であり、且つこの2種類は指向性を持っている作用力であると指摘した。この4種類の作用力の下で、両者間に存在しているフェイスバランスの均衡が失った現象に注目した。実例に対する分析を通して、トラブルが生じた位置によって様々な修復組織をなしていることと、フェイス修復方策が一定のパターンで施される現象も観察した。

そして、フェイスバランスというものが会話参加者間において客観的に存在し、あらゆる行

¹² ここでは主に、一個目のブロックでフェイス侵害行為が何回も繰返されたことを指して「過度なFTA」だと言っている。

動がその均衡状態に影響を及ぼしうるため、話者が発話する際に、当面のフェイスバランスの状態及び相手の言動がそれに与える影響などをトータルした上で、そのバランスを維持する効果のある発話を選択しているというシステムが成り立っていると主張したい。このシステムの適用範囲を検証するために、今後更に多くの会話例を収集して検討しなければならない。

(ちょう れいれい・言語文学専攻)

【トランスクリプトの表記方法】

- [] 二人の発話が重なっている部分を示す。
,, 発話の途中に相手の発話が入った場合、発話がまだ終わっていないことを示す。
: 発話中のコロンは、直前の音が引き延ばされたのを示し、コロンの数は、引き延ばしの相対的長さを示す。
? 疑問符は、直前部分が上昇調で発話されるのを示す。
() 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
<#> 聞き取り不能の部分を示し、#の数で聞き取れなかった部分の長さを示す。
波線 発話者が笑いながら話していることを示す。
→ 分析において注目する行は左端に矢印を付けて示す。
《文字》 転記者による様々な種類の注釈・説明を示す。
「文字」 直接話法で引用した部分を示す。

参考文献

- E. A. Schegloff, & G. Jefferson, & H. Sacks. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 54(2), 361-382.
- Goffman (1967) *Interaction Ritual: Essays in Face to Face Behavior*, 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』法政大学出版局
- 林始恩 (2010). 「親和的關係における否定的評価——日韓の話者の話し方と FTA 補償行為に注目して——」『筑波応用言語学研究 17 号』, 99-109
- 串田秀也 (1995). 「トピック性と修復活動——会話におけるスムーズなトピック推移の一形式をめぐって——」『大阪教育大学紀要第 44 巻第 1 号』, 1-25
- 栗原豪彦 (2008). 「ポライトネス理論をめぐる論争——「合理主義的 (rationalist) アプローチ」と「言説的 (discursive) アプローチ」」『北海学園大学人文論集第 41 号』, 1-51
- 栗原豪彦 (2009). 「ポライトネス理論をめぐる論争——「合理主義的 (rationalist) アプローチ」と「言説的 (discursive) アプローチ」(承前)」『北海学園大学人文論集第 42 号』, 85-126
- 三牧陽子 (2008). 「会話参加者による FTA バランス探究行動」『社会言語科学第 11 巻第 1 号』125-138
- 岡本真一郎 (2006). 『ことばの社会心理学 [第 3 版]』ナカニシヤ出版
- P. Brown, & S. C. Levinson. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Pomerantz, A (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred

turn shapes. *Structures of social action-Studies in Conversation Analysis*. Cambridge. 57-101.

Suzuki, Kana (2010). *Other-initiated repair in Japanese: accomplishing mutual understanding in conversation*. Unpublished doctoral dissertation, Kobe University.

横溝環 (2012) 『フェイス相互作用理論 — 日本語学習クラスにおける相互作用からフェイスワークをとらえる —』 春風社